

ニーズ捉え全国で五百社と取引実績 管理でリスクマネージメント重要に

(株)イーコス 南出寿法代表取締役について



取締役代表
南出 寿法
(株)イーコス

るまでの経緯は

「廃棄物管理

会社を設立する

前は、物流業を

営んでいた。コ

ンビニへの配送

を手がけていた

際、低価格に抑

えられながら時間や品質に

厳しく問われる動脈物流に

対して、静脈物流としてコ

ンビニと契約している廃棄

物回収業者は、回収方法、

収集運搬費、サービス内容

が地域により内容が大きく

異なっていた。また排出事

業者ですら、目の前からゴ

ミが無ければ良く、取りあ

えず根拠無くコストを安く

する事に注力している事が

判った。このような実態を

見て、動脈物流のサード

パーティー的な立ち位置で

静脈物流をマネジメントす

ることで、廃棄物処理

業界の透明性・信頼性を高

めることを主旨として設立

した。」

「以前は廃棄物に関する

取り決めでは、曖昧なこと

が多かった。例えばあると

ころはキロ換算だが、ある

ところは立米換算、あると

ころはコンテナ換算。また

処理料金においても地域格

差、業者格差がかなり大き

い。料金の不透明性が高く、

委託企業はその当時、廃棄

物処理業界の不透明さに不

満を抱えていた。処理料金

の相場が解らない、根拠の

あるコストが提示されてい

ない、既得権など業界独特

のルールで交渉の余地がな

い、廃掃法で排出責任が問

われるのであるから当然自

ら委託する業者を選択した

いが出来ない等。このよう

な委託企業の不満を取り除

き、痒いところに手が届く

ようなサービスを始めた。

それがこのイーコスのビジ

ネスモデルであり、全国の

廃棄物処理業者や他の廃棄

物管理ネットワークとも繋

がりを持ち、排出事業者・

廃棄物処理業者の間に入

り、廃棄物処理のフローを

見える化することで安心・

安全な処理をご提案させて

頂いている。全国で五百社

の排出企業との取引実績が

あり、その取引先は、大手

の食品・飲料メーカー様、

外食チェーン様、物流業者

様、建築業者様等々多岐に

渡っている。」

「廃棄物の管理会社が増

えたのは

「近年は廃棄物管理業者

がかなり増えたが、その多

くは手配業にすぎない。現

在の管理業社へのニーズ
は、①CSRを含めたコン
プライアンスのための様々
なサービス、②廃棄物処理
の見える化によるコストの
適正化、③排出企業と廃棄
物処理業者双方の意識改
革、④リスクマネジメント。
多くの廃棄物管理業社は、
業者を紹介し、回収業務を
手配して、そこで終わり。
お客様の会社・現場にも行
かず、顔と顔を合わせない。
それが合理化と言えれば聞
えは良いが、お客様から依
頼されている以上、いろい
ろな現場に向き、様々な
問題点を一緒に解決してい
かなければならない。」

「現在の廃棄物管理業の
ニーズは何か
「以前は各リサイクル法
の絡みで食品リサイクルの
対応であったり、コストの
削減であったが、最近では、
ダイコーの件もあり、廃棄
物処理に関わるリスクマネ
ジメントになっている。現
状の廃掃法においては廃棄
物処理という「委ねる」行

為が「リスク」を委ねると
う事実には排出企業側も意識
が高まり、処理フローの見
える化・適正化というニー
ズが増えている。弊社は、
長年の管理ノウハウとネッ
トワークを活用した廃棄物
WEB管理システム「エコ
ロジネット」の開発と運用
を行っており、排出元から
の廃棄製品や廃棄物等の処
理フローを見える化し、情
報を共有する。」

「また、廃棄物処理業者
やリサイクル処理業者との
連携で徹底的に合理化を図
る。例えば一つのビルに十
社のテナントが入ってお
り、そこに十社の回収業者
が回収を行っているとは仮定
した場合、これでは余りに
も無駄が多い。ではこの回
収車輛十台を五台にしま
しようかと提案する。廃棄物
と資源物の収集において、
こちらが静脈物流としての
仕組み作りと料金を提示し
て合理化を図る。大手企業
の廃棄物担当者の中には、
そういった新たな改善提案

に取り組んで行きたいが、
既存業者と交渉したくない
企業や、何とか既存業者を
切り換えたいという企業も
ある。そのような面倒で煩
わしい交渉ごとを、弊社が
代行する。」

「廃棄物管理会社という
のは、アセットを持たない
観点からいわば他人のふん
どしで相撲を取っているよ
うなもので、よほどの差別
化を図らない限り、お客様
のご要望にお応えする事は
出来ない。また、コスト面
だけの価格で動くお客様も
多い。廃棄物全体の量が減
少し続けているが、今後更
に人口減によつて廃棄物量
の減少が予想される。いず
れ淘汰されるこの廃棄物管
理業界で、どのように生き
残っていくのか。どのよう
な形態に変化していくの
か。私自身、今後の廃棄物
管理業にかなり危機感を
持つており、次のステップ
に向け、新たな取組みに向
けて動き出している。」